

火傷癩痕癌の3例

昭和32年6月22日 受付

信州大学医学部第一外科教室 (主任: 星子直行教授)

立木 光 杉山 敏夫

火傷癩痕癌は本邦に特に多い皮膚癌とされ全皮膚癌の約20%を占めると云われている^①。本邦に於ては1904年三橋により始めて報告されて以来、1957年2月迄に報告された症例について我々の調査し得た範囲では177例に達している。

吾々も最近火傷癩痕に発生した皮膚癌の3例を経験したのでこれを報告し、併せて若干の文献的考察を加えた。

症 例

第1例 59才 男 農業

病歴: 6才の頃左前腕に火傷をうけ癩痕性に治癒した。時々同部に掻痒感を感じずる事があつたが特に変化を認めなかつた。約1年前より癩痕部が湿潤し悪臭のある分泌液を認めるようになった。医治を受けたが治癒せず、約1ヶ月前から疼痛を感じずる様になつたので、1955年4月8日当科外来を訪れた。

現症及び経過: 左前腕内側のほぼ中央に $6 \times 4.5 \text{cm}^2$ の潰瘍を認める。潰瘍底は凹凸不平、辺縁の1部は隆起して硬く色素沈着を認める。(写真1) 潰瘍面より悪臭ある分泌液を出し、自発痛及び著明な圧痛を訴える。左腋窩に小指頭大に腫脹したリンパ腺1個を触れる。血液「ワツセルマン」反応陰性。

1955年4月25日左上腕下 $1/3$ にて切断術を施行した。病理組織学的には扁平上皮癌であり、癌巢中に所々癌珠が認められた。約3週間後全治退院したが、同年12月末左腋窩リンパ腺に腫脹を来し再度入院。リンパ腺剥出術及び腋窩廓清術を受けた。切除したリンパ腺の組織像は原発癌巣と同じく扁平上皮癌であつた。その後約1年患者は死亡したが原因は不明である。

第2例 45才 女 農業

病歴: 3才の頃炬燵にて左足趾部に火傷をうけ癩痕性に治癒した。約1年後癩痕部に小潰瘍を生じ、以来容易に治癒せず少しずつ増大してきた。1956年2月頃より同部に疼痛を感じずるようになり、同年8月11日当科外来を訪れた。試験切除を行い病理組織学的検査の結果「カンクroid」と診断され10月5日入院した。

現症及び経過: 左足趾面に広汎高度の火傷癩痕及び變縮を認める。(写真2) 足趾面に $4 \times 6 \text{cm}^2$ の潰瘍を認め、悪臭ある分泌液を出す。潰瘍底は凹凸不平辺

縁は隆起して不整、左鼠径リンパ腺の腫脹は認められない。血液「ワツセルマン」反応陰性。

1956年10月5日左下腿下 $1/3$ にて切断術を施行した。12月5日全治退院以後の経過は良好である。

第3例 50才 男 農業

病歴: 12才の頃炬燵にて右足跟部に火傷をうけた。1部は癩痕性に治癒したが、尚1部に湿潤せる部分を残した。種々自家療法を試みたが容易に治癒せず、1956年6月某病院にて植皮術を施行されたが成功しなかつた。悪臭ある分泌液がつき難治を極めた。

其后某病院にて組織学的検査をうけ角化著明な扁平上皮癌との診断を受け1956年12月12日当科に入院した。

現症及び経過: 右足跟部に於て、脛骨髁より腓骨髁に拡がる $12 \times 6 \text{cm}^2$ の潰瘍を認める。脛骨髁の部分は潰瘍底は凹凸不平にして、腓骨髁に拡がる部分は靱粒状をなす。悪臭ある分泌液を出し膿苔及壊死組織で被われ、著明な圧痛を認める。辺縁は硬く隆起している。右鼠径部に拇指頭大及小指頭大のリンパ腺各々1個を触れる。血液「ワツセルマン」反応陰性。(写真3)

1956年12月14日右下腿下 $1/3$ にて切断術施行。1957年2月13日退院した。病理組織学的には「カンクroid」の像を呈し、鼠径リンパ腺の腫脹せるものは炎症性変化を呈し、転移像は見られなかつた。

考 按

本邦に於ける火傷癩痕癌の全癌に対する割合は0.2~1.1%、平均0.5%と云われ^①外国の統計即ちArndt^②の0.1%に比しその頻度がやゝ高い。又火傷癩痕癌の皮膚癌に対する割合は本邦に於ては前述の如く20%^①で、Trevés^③の1.1%に比し約20倍の高い値を示している。これは広汎にして高度の火傷が本邦に特に多い為であろうと村上^④は説明している。

又最近に到り原爆熱傷の癩痕に発生した癩痕癌の症例が報告され^④注目されている。玉川^⑤は原爆被爆後の火傷癩痕癌発生の可能性は充分あり得ると述べ深甚なる注意と長期の観察を要すと云つている。然し伊藤^⑥は1949年から1955年に到る6年5ヶ月間組織学的に確認した皮膚癌30例中に被爆者4例を認めたが原爆による熱傷癩痕に生じたものは1例も無かつたと述



(1)



(2)

べ、更に原爆と悪性腫瘍との関係について「今の所、被爆者に於ける悪性腫瘍の発生は稀である」と云つて



(3)

いる。此の問題については更に長期間の観察を要するものと考える。

性別：男対女の比は報告者により多少の相違がある。即ち重松^⑦は3.4:1, 村上^①は3.8:1, Treves^③は3.7:1, Arndt^②は2.6:1と述べている吾々も調査に際し性別の明らかなもの155例についてみると、男118例に対し女37例で、その比は大凡3.2:1となり男は女に比し3~4倍多いと云える。

火傷をうけてから癌発生までの期間。此の期間についても重松^⑦は最短9年最長64年で平均36.8年と云い村上^①は最短5年最長73年平均36.1年、梶谷^⑧は平均37年と述べている。しかし吾々の調査によれば此の期間の短いものとして、昭和25年12月清水^④により報告された火傷後1年9月にして癌発生を見た例がある。吾々の症例は火傷後夫々53年42年及び38年であつた。又此の期間について村上^①は1~5才時に火傷をうけたものと、6~10才時火傷をうけたものを比較すると、前者に比し后者は癌発生に到る期間が約14年早い点を指摘し、此の差違は6~10才或はそれ以後の癩痕は1~5才時のそれより癌性変化を来し易い傾向があるためであると述べている。又癩痕化の不完全なものも癌性変化を来しやすい。此の点吾々の第3例は12才で火傷をうけ癩痕化不全を来した場合で確かに他の2例に比し早く癌発生を認めている。

癌発生年齢は40~50才后が最も多く、50~60才及び30~40才がこれに次いでいる。即ち村上^①の統計によ

れば最低年齢18才最高年齢77才で平均年齢は44.8才となつている。吾々の調査したものと、中癌発生年齢の明らかなもの32例についてみると最低23才最高64才で平均年齢は46.3才である。

発生部位としては下肢が最も多く、頭部、上肢がこれに次いで多く見られる。吾々も部位の明らかなもの133例を調査したが、下肢75例で最も多く約56%、頭部34例で25.5%、上肢22例で16.5%、その他2例となる。

転移は癌の性質上発見が早い事と瘰癧のための狭いリンパ道が転移を妨げる事等により比較的少いと云われている。部位的には上肢に発生したものが他部に発生したものより転移を起しやすくと云われている。

診断として最も確実なものは試験的切除を行い、病理組織学的に検査する方法である。難治性の火傷瘰癧潰瘍に対しては癌性変化に対する十分な注意が必要である。

処置としては四肢では切除及び切断術、頭部及び高度のものに対しては放射線療法も行われている。

結 語

(1) 火傷瘰癧に発生した皮膚癌の3例を報告した。3例中2例が「カンクロイド」1例が扁平上皮癌であつた。

(2) 何れも切断術を施行した。第1例は術後1年余にして死亡したが、他の2例は経過良好である。

(3) 火傷瘰癧潰瘍に対しては植皮術を行い、癌発生に対しては早期に切除切断等積極的治療法が望ましい。

(摺筆するにあたり御懇篤なる御指導と御校閲を賜つた星子教授、岩月助教授に深甚なる感謝の意を表する)

参 考 文 献

- ①村上：火傷瘰癧瘰癧，臨床外科，4：291，1949。
 ②Arndt, G.: Über den Brandnarbenkrebs und das symmetrische Karzinomen der Extremitäten, Brun's Beiträge f. Klin. Chir., 157:305, 1933. ③Treves, N., and Pack, G. T.: The development of cancer in burn scars, Surg. gyn. & Obst., 51: 749, 1930.
 ④三木：広島原子爆弾熱傷瘰癧瘰癧の1例，総合研究報告会集録医学及薬学編，424，1954。 ⑤山田：火傷後発生した皮膚癌の3例，臨床外科，10：961，1955。
 ⑥伊藤：皮膚癌の統計特に原爆との関係，皮膚と泌尿，17：470，1955。 ⑦重松：火傷瘰癧瘰癧，皮膚と泌尿，7：467，1939。 ⑧梶谷：火傷瘰癧瘰癧の統計的観察，広島医学，2：423，1949。 ⑨清水：潜伏期の短い火傷瘰癧瘰癧の1例，臨床外科，6：547，1951。 ⑩楠：皮

- 膚癌に就て，外科の領域，2：667，1954。 ⑪入江：皮膚癌の2例，皮膚科性病科雑誌，65：631，1955。
 ⑫福田：火傷瘰癧瘰癧，内科の領域，3：691，1955。
 ⑬百井：皮膚癌の3例，日外会誌，56：270，1955。
 ⑭西村：巨大な皮膚癌の1例，日臨外，16：164，1955。
 ⑮中牟田：九大皮膚科に於ける皮膚癌の統計的観察，皮膚と泌尿，17：769，1955。 ⑯戸島：興味ある瘰癧瘰癧の3例，岩手医科大学整形外科業蹟集，1：108，1953。
 ⑰高橋：火傷瘰癧瘰癧の1例，皮膚科性病科雑誌，64：510，1954。 ⑱増田：火傷瘰癧瘰癧の2例，皮膚と泌尿，15：266，1953。 ⑲原口：頭部瘰癧瘰癧の治験例，皮膚科紀要，49：144，1953。 ⑳岡部：若年者に見た瘰癧潰瘍股淋巴腺転移の1例，日外会誌，54：184，1953。 ㉑土屋：火傷瘰癧瘰癧，皮膚科性病科雑誌，64：225，1954。 ㉒高野：火傷瘰癧瘰癧，日大医学雑誌，7：222，1944。 ㉓服部：腹腸骨間切断術を施せる大腿火傷瘰癧瘰癧の1例，日臨外，7：434，1944。 ㉔玉川：原子爆弾被爆による「ケロイド」の研究，臨床外科，8：231，1953。

(文献以下省略)

Three Cases of Burn Cancer

Akira Tatsugi and Toshio Sugiyama
 Department of Surgery, Faculty of Medicine,
 Shinshu University.

(Director: Prof. N. Hoshiko)

Three cases of burn cancer were reported in this paper. All of them underwent an amputation of the affected extremities. Histological studies revealed that two of them were carcinosarcoma and the other was squamous cell cancer. One patient died of undetermined cause about one year after the operation, while the others showed an uneventful recovery.

It is to be emphasized that long-standing ulcer on the burn scar should be treated surgically as early as possible to avoid its transition into cancer.